〔論文〕

台湾における省籍の違いに着目した商店街景観認知の
評価分析Evaluation of Streetscape-Consciousness in terms of the
Difference of Provinces in Taiwan

Shu-Huei LIU : University of Tsukuba

Yasushi ASAMI : University of Tokyo

劉 淑恵*
浅見 泰司**

With the focus on the shopping street, this study tries to search and analyze the influences of province on the evaluation of shopping streetscape in Tainan. Through questionnaires of streetscape - consciousness, a comparison of landscape of shopping street is made. According to the result, the provincial difference occurred on 1980s more than on 1930s, when compared with 1930s streetscape - consciousness and 1980s streetscape - consciousness. In particular, "Benshen" and "Waishen" tend to have different view in monotony of the 1930s streetscape, and "Benshen" and "Keja" tend to have different view in familiarity of the 1980s streetscape. These differences may be caused due to the change in the attitude of "Benshen" toward the environment of cities in Taiwan.

Keywords : Province, Streetscape-consciousness, Shopping street

省籍, 商店街景観認知, 商店街

1. はじめに

本論文では、台湾における省籍の違いによる商店街景観の認知を、台南市の4商店街の1930年代と1980年代の写真に対する評価に関するアンケート調査から分析する。省籍とは、台湾における人々のルーツのことであり、15世紀から20世紀初期にかけて中国南東部などから移住した本省人と客家人¹⁾、そして第二次世界大戦後、台湾に移住した外省人などの区別を表す。戒嚴令のもとでは、主

として支配階級に多かった外省人と被支配階級に多かった本省人、客家人という社会構造が続いていた。しかし、外省人にはいずれ中国大陆に帰るという意識を持っていた者も多く、台湾は一時的に滞在する仮の宿という意識があった²⁾。そのために、都市景観に対してもさほど強い改善意識がなかった可能性もある。戒嚴令解除後は、外省人において、それまでの仮宿的意識から、永住する土地としての意識へという変化が徐々に進んでいった。そのため、都市を自分の物としてよりよ

劉 淑恵* (りゅう しゅくえ) 正会員・筑波大学農学研究科

浅見 泰司** (あさみ やすし) 正会員・東京大学 空間情報科学研究センター

く改善していく意識が強化されていったと思われる。

そこで、省籍の違いによって、都市景観を判断する傾向がどのように異なるか、また、特に何に着目して判断を下しているかを調べ、無意識に反映するであろうと考えられる省籍の差異に基づく都市観の違いがどのように表れるのかについて考察してみたい。

2. 省籍ごとのまちの景観構造と意識の歴史的経緯

(1) 台湾における省籍をめぐる歴史的経緯

面積約3.6万km²の台湾は、少なくとも100年前ま

では中国大陆の統治者の目に入らなかった「化外の地⁽¹⁾」であった。百年後、なぜ台湾の国際的地位と国内省籍の紛争が焦点になったのだろうか。元大統領の李登輝氏は省籍を問わずにみな(1998.12.04, 台北市市長選挙のキャンペーンにて)「新台湾人⁽²⁾」と宣言した。あえて省籍の問題を表に出さなければならなかったのは、歴史的な経緯から省籍間の衝突と差異があったためである。

1945年から台湾島は住民達が大統領の直接選挙を行う1988年まで、蒋介石氏の「蒋氏王朝」を主とした国民党の統治下にあり、政治の力で外省人と本省人の社会地位の格差は拡大していった³⁾。1997年、世新大学の李筱峰教授は「台湾に移動し

表1 台湾における省籍の違いによる意識差異一覧表

	出自と意識	社会構造	人口構成	住宅街の景観構造	景観の捉え方の仮説
本省人	1.15世紀から17世紀を経て台湾へ移住。 2.主に中国の東南にある福建省から移住。 3.19世紀中期から台湾に定住。	1.1980年代までは政治上の被統治階級。 2.就職状況:自営業と個人企業に集中。 3.所得は最も低い。 4.母語:口南語	70%(1992)	1.「閩南村」については、家の屋根の形は一種の財力の証しととらえ、派手にする傾向。 2.鷹揚でかつオープンな性格から町並みも乱雑に見える。	1.第二次世界大戦後50年間は主として自分たちがかわって都市景観を作り上げてきたという自負がある。 2.街に愛着を持っている。商業に従事する者が多い。 3.すべての景観に対して何らかの評価を積極的にし、そのために評価がばらつく。また、常に新しい文化に対する好奇心を持ちながら吸収する性格から、現況の景観に対して満足できない気持ちを持つ。
外省人	1.1945～1949年から蒋介石氏と一緒に中国から台湾に移住。 2.1990年までは中国へ戻りたい気持ちが強かった。 3.中国人である意識がなお続いている。	1.1945-1980年代間で政治上の統治階級。 2.就職状況:軍、公、教育に集中している。産業別ではサービス業に集中。 3.所得は最も多い方。 4.母語:北京語	13%(1992)	1.財力・権力を持たない外省人が多く住む「眷村」は昔の低層公営住宅のような単純な外観の建物が列状に並ぶ。 2.一軒当たり面積は小さく、質素な家である。	1.都市の形成という面からは第三者的な立場に置かれてきた。 2.外省人としては、昔の敵である日本人がベースを造り、且つ主な構成メンバーが本省人である台南市の都市景観に対して常に批判的でない第三者的な目を持って認識。 3.長期的に政治権力を握ってかつ中国に戻ることを念頭においていたため、台湾の都市景観に対しても無関心な態度(自分の街ではないような態度)をとり、権力者側としての優越感を持ちつつ、批判する傾向。特に、街の看板の大きさや色、騎楼(台湾の商業地域では1階部分をセットバックした公共の歩行者空間)の通過し易さなど為政者の目から目立つ物について厳しい指摘をする。
客家人	1.台湾に移住した時期については閩南人(本省人)とはほぼ同時期。 2.主に広東省からの移住。 3.19世紀中期から台湾に移住した。	1.1980年代までは本省人と同じく、政治上の被統治階級。 2.就職状況:自営業と個人企業に集中。 3.所得は外省人より少し低い程度である。 4.母語:客家語	15%(1992)	1.「客家荘」はスズメの尻尾に似た屋根の端部が特徴的。 2.町あるいは家の周りが清潔であることが一般的。	1.本省人、日本人、外省人の被支配階層という抑圧されてきた歴史を背負う。 2.日本統治時代の都市構造に対しても、その後の主として本省人が建設してきた都市景観に対しても批判的。 3.「保守的」、「まじめ」な客家人は、乱雑に見える本省人の町はやや粗雑と考え、抑圧された時代を思い出して情緒的な反応を示す。特に昔から商業地域では本省人が多数派であったため客家人は控えめにふるまい、ルールを守る傾向が強い。そのため、違法駐車や廊下占用など、公共スペースの使われ方について厳しい判断をする。

た国民党政権はあくまでも中国を中心とする思想であった。隔離政策（軍眷村⁽³⁾の設置）と軽視政策（台湾語の抑制）によって、外省人と台湾人の交流が平行線になり、数十年住んでも台湾を認めがたい状況になってしまった。」と語った⁽⁴⁾。このような背景で国民党と一緒に台湾に移住した外省人の大半が当時の政治・経済の中心地域の台北市に集中して住んでいる。その他は軍隊と一緒に移動したため、台南市に移住した外省人は少なかったと推定できる。

1992年時点で本省人14,324,508人（70%）、客家人3,058,962人（15%）、外省人2,658,805人（13%）であった⁽⁵⁾⁽⁶⁾。その後、前述したように省籍はセンシティブな政治問題となって、政府側が正式的に祖籍（中国の籍）の調査をしない方針となった。

(2) 省籍ごとの街の景観構造

特定の省籍が構成する住宅街（例えば本省人の「閩南村」、外省人の「眷村」、客家人の「客家莊」など⁽⁴⁾）では各々特徴的な風貌が現れる。屋根の形、街並みなどの外観からおおよそどの省籍の集まりか判別できる。表1に示すように、本省人は歴史的に豊かな平原に住み続けてきたことにより資本は豊かで商売上手な傾向をもつ⁽⁷⁾。人口が多く、ものに対する所有権意識が強い。ただし、相続によって資本は豊かだが、省籍別の比較の中では本省人のフローの所得は最も低い方である。屋根の形は一種の財力の証しとしてとらえられ、できるだけ派手にする傾向がある⁽⁸⁾。また、外省人が多く住む「眷村」は一軒当たり面積の小さな、質素な家である。これは少なくとも70年代までは「反攻大陸⁽⁵⁾」という意識が外省人の心にあり、あくまでも台湾島は一時的に滞在する仮の宿と考えたためである⁽⁷⁾。そのために本省人と客家人は外省人を「過路客⁽⁶⁾」と呼ぶこともあった⁽⁴⁾。客家莊では、家の周りが清潔で、よく整理していることが伺われる。家の色彩は単調で、屋根の端部がスズメの尻尾に似ていることが特徴的である。

(3) 省籍ごとの都市の景観評価に関する仮説

以上のような省籍による歴史的経緯や文化の違いは、都市の景観評価に対しても微妙に異なると現れると思われる。

今回の研究対象とした台南市は日本統治時代に都市の骨格が形づくられ、それをベースとして主に本省人が建築改変を繰り返した都市の歴史をもつ。そのため、外省人は、権力者側としての優越感⁽⁷⁾を持ちながら、昔の敵である日本人がベースを造り、かつ主な構成メンバーが本省人である台南市の都市景観に対して常に批判的にないし第三者的な目を持って認識してきたと思われる。

表1に示すように本省人の場合には外省人よりは、街に愛着を持っていると考えられる。また、常に新しい文化に対する好奇心を持ちながら吸収する性格からは、現況の景観に対して満足できない気持ちを持つ傾向があるだろう⁽⁷⁾。

「東洋のユダヤ人」と言われる客家人⁽⁸⁾の場合は⁽⁹⁾、本省人、日本人、外省人の被支配階層という抑圧されてきた歴史を背負っているため、日本統治時代の都市構造に対しても、その後の主として本省人が建設してきた都市景観に対しても、批判的に見つめる傾向があると思われる。そのため、結果的には外省人と類似して、都市景観についても批判的な判断が多い可能性もある。因みに、前述したような歴史の影響もあって、過去の調査において、抑制的にならざるを得なかった客家人は自分の省籍を明瞭に示さない傾向がみられた⁽¹⁰⁾。

以下ではこれらの仮説について検証し、かつ日本の残した都市計画的な骨格（30年代）とその後の台湾における主要街路での建築的変革（80年代）が現在の台湾の居住者にとってどのように捉えられるのかを景観の面から考察する。

3. 既往研究

台湾では都市景観に関する評価研究については、1987年の街路を対象とした景観制御に関する研究がある⁽¹¹⁾。この論文は専門家にアンケート調査を行い、それを単純集計してまとめた研究である。

その後、蔡が1993年から街路の看板問題に着目して一連の研究を行なった。看板を機能面から4つの類型にまとめ、法令に基づいて記述し¹²⁾、翌年、都市景観の観点から広告看板の設置とその影響の研究を上、下篇で、専門誌に発表している。研究内容と手法は前述と変わりなく、概説的な記述にとどまっている¹³⁾。1994年、郭がアニメーションと視覚模擬を用いて都市景観に対する評価を行った¹⁴⁾。これは政府からの委託調査をまとめた報告書である。2年後、審査付きの論文が発表された。研究内容はパソコンを用いた動画の視知覚評価である。すなわち、3通路について視覚の複雑度と空間秩序に基づいて9つの通路景観をアニメーション化し、これを用いて学生を対象として意識調査を行った¹⁵⁾。1995年にも学生の論文で景観を模擬評価として景観の制度面での研究があった¹⁶⁾。また林と章は、DanielとBosterが1976年に提案した定量的手法である「景観美質評価法 (Scenic Beauty Estimation)」という評価システムを、台湾のまちづくりに応用している¹⁷⁾¹⁸⁾。その他、既存研究には都市景観に関する好みの研究などもあった。これらは学生へのアンケート調査を通して、因子分析から得た結果をまとめた研究である¹⁹⁾。住民へのアンケート調査を対象としての研究調査もあった。しかし、これは単に公園の景観

の維持に関する参加意欲の有無に関するものである⁽⁹⁾²⁰⁾。

本研究とのかかわりでは、台湾の都市景観に関する評価研究は、概説的な研究が多い。近年、定量的分析や心理的効果の解析などが行われているが、景観意識を省籍と結びつけた研究例はない。省籍に関しては、社会的な研究は数多くある⁶⁾。しかし、台湾の省籍にかかわる社会構造が都市景観に及ぼす影響を考察したものはない。

4. 研究方法と対象商店街

対象地域は、台湾の古都『台南』である。台南市民政局戸政課の統計資料によると2000年4月現在の総人口数は約73万人である。台南は日本の『京都』と似た存在で、現代化しつつある台南の繁華

図1 省籍の割合

参考：参考文献5)

図2 4つの街路の30年代と80年代の景観写真

街には同時に伝統的外観を持つ商店街が共存している。

本研究では、同じ場所の商店街について、30年代と80年代の写真を用いて、景観要素と構造などのアンケート調査を行う。アンケートは、内容がやや高度で専門的な知識も若干必要であるという判断から、国立成功大学の都市計画系の学生に対して行った。20代の大学生にアンケートしたのは、約10年前の1987年が大統領が外省人から台湾出身の李登輝氏に変わった年であり、彼らがその時にちょうど多感な時代を送っていた年齢層であるためである。

前述4つの商店街としては、台南市の市中心に位置し、歴史的な意味をもつ商店街と思われる民権路、民生路、中山路、中正路の4つの代表的な商店街を対象地区として選定した。図2に示すように50年にわたる空間の変化が大きく街の雰囲気を変えている。各々の街ごとに30と80年代の写真は同じ方向、場所のものとした。30年代の写真は白黒だったため80年代の写真も白黒に変換した。30年代の写真を見ればそれぞれの街の機能がはっきり違っていたことがわかる。しかし、80年代の写真では各々の街の機能が同一であるように見える。

時の変遷によるこの4つの商店街の変化に基づいて、各々の街に関する景観要素を抽出し、20代の大学生がどのように感じているのかをアンケート調査で調べた。1997年2月、成功大学都市計画学系の学生45名¹⁰⁾にA3版一枚に載った8枚の景観写真(図2)²¹⁾を見ながら、それぞれ該当するアンケート用紙A4の8枚で、表3に示す17個の形容詞対について景観印象の当てはまり度を7段階¹¹⁾²²⁾で答えてもらい、さらに表4-1および表4-2に示すような景観要素の中から、それぞれの形容詞対に関する回答を何に着目して答えたのかの理由付けとして、該当するものすべてを記入してもらった。各形容詞対における理由付けとしては、まず商店街の街路景観として主要要素であ

る建物とそれ以外の要素に分けて、次にその各々を物的要素と質的要素に分けて、計4分類19項目を選定した。これらの項目の内容はできるだけ街にふさわしくかつ回答者も分かりやすいように設定した。しかし、省籍を問わずに各々の写真に対する形容詞対毎に、19項目の中から選ばれなかった項目とわずかな人数が選んだ項目を削除した結果、残りは表4-1に示すような7種類となった。4名の学生が省籍の欄を空白で答えた。その結果、41名の対象者における省籍の割合は図1に示したように客家人と外省人はそれぞれ6人(14.6%)と3人(7.3%)にすぎない。本省人は絶対多数の32人(78%)を占めている。

図1に示したように、特に外省人のサンプル数が少ないことは分析力を高めるには弊害となっている。しかし、省籍による差別をなくすために、省籍を明らかにしようとしめない風潮を鑑みると、大規模にこのような調査を行うことは極めて難しい。したがって、本研究で得られたデータは限られたものであるが貴重であるので、少しでも有意義な傾向を読みとることを目指して分析を行うこととした。

5. 分析方法と結果

四つの商店街の中で、80年代と30年代の有効回答数の多い民権路を省籍差異の分析対象とした。省籍を変数として、対象商店街の景観に対する形容詞対による評価と、その理由付けとしての景観要素に関して分析を行う。1) 7段階の尺度評価における形容詞対17対中の16対(個別印象というよりも総合的な印象になってしまう「全体としてよい／悪い」を除く)を計算分析の対象とした(表3)²³⁾²⁴⁾。2) 前述のように、各形容詞対における理由付けとして、回答者に選ばれなかった理由付け(表4-2)を除いて、高い順から多く選ばれた7つの理由付けを選び出す(表4-1)。カイ二乗計算¹²⁾で省籍が景観に対する感覚に及ぼす影響を探り出し、カイ二乗検定を行った¹³⁾²⁵⁾。

表3 形容詞対一覧表

1. 豪華な／ 素朴な	2. 統一感のある／ 統一感のない	3. 魅力のある／ 魅力のない	4. 雰囲気が良い／ 雰囲気が悪い
5. 個性的な／ 個性的でない	6. 広々とした／ 窮屈な	7. 穏やかな／ 穏やかでない	8. おもしろい／ おもしろくない
9. 親しみやすい／ 親しみにくい	10. 圧迫感がない／ 圧迫感がある	11. にぎやかな／ さびしい	12. 人情味のある／ 人情味のない
13. 歴史性のある／ 歴史性のない	14. 醜い／ 美しい	15. 複雑な／ 簡単な	16. 秩序的／ 無秩序的
17. 全体として良い／全体として悪い			

表4-1 選ばれた各々の形容詞対の理由付け一覧表

A: 建物の物的要素(Building's physical elements)	看板 (X1)
B: 建物の質的要素(Building's property elements)	高さ、広さ、外観、材質、建物の歴史 (X2) 窓のタイプ、材質、規模 (X3)
C: その他の物的要素(Other feature's physical elements)	電線 (X4) 違反駐車 (X5) 路面 (X6)
D: その他の質的要素(Other feature's property elements)	街灯の明るさ、高さ、アート (X7)

表4-2 選ばれなかった各々の形容詞対の理由付け一覧表

A: 建物の物的要素(Building's physical elements)	1) 屋根 2) 窓 3) 廊下 4) 柱
B: 建物の質的要素(Building's property elements)	1) 看板の色彩・高さ・大きさ・文字・材質 2) 廊下の高さ・広さ・形 3) 屋根の型・色彩
C: その他の物的要素(Other feature's physical elements)	1) 電柱 2) 街灯 3) 道の幅 4) 街路樹
D: その他の質的要素(Other feature's property elements)	1) 路面の舗装材料、色彩

(1) 省籍における80年代の商店景観に対する評価の差異

カイ二乗分析の結果から商店景観の形容詞対に対する省籍の差異は有意水準10%以下となる項目が少なかった。16形容詞対の半数以上において有意水準10%以上となっていた。本省人と外省人の80年代商店街景観に対する評価においては有意な差は少ないが、「広々とした／窮屈な」(有意確率(以下、同じ):0.071)と「人情味のある／人情味のない」(0.086)で若干の差があった。また、客家人と本省人の間も「親しみやすい／親しみにくい」(0.039)と「圧迫感がある／圧迫感がない」(0.025)では有意な差異があった(表5)。客家人と外省人の回答傾向は類似していた。差異が少ないながら、客家人と本省人、また外省人と本省人

の差異が有意であった。客家人と外省人の回答者数が少ないにもかかわらず有意であったことは、それぞれの項目についての差異はやや顕著であったと考えて良い。有意確率の平均値からみると、省籍における80年代の商店街景観に対する「雰囲気がよい／雰囲気が悪い」という見方は他の形容詞対よりも差異がなかった。

(2) 省籍における80年代商店街景観に対する理由付けの差異

80年代商店街景観における各形容詞対の理由付けの差異は次の傾向を示した。外省人と客家人、また本省人と客家人の回答傾向の差異に関しては有意水準10%以下となる項目がなかった。本省人と外省人の差異が前述の二組の差異よりも顕著であった。特に「統一感のある／統一感のない」(有

表5 省籍による商店街景観に対する評価の差異

	80年代				30年代			
	客 vs. 本	本 vs. 外	外 vs. 客	平均 値	客 vs. 本	本 vs. 外	外 vs. 客	平均 値
1 豪華な／素朴な	0.923	0.683	0.710	0.772	0.972	0.978	0.996	0.982
2 統一感のある／統一感のない	0.836	0.504	0.321	0.554	0.917	0.857	0.959	0.911
3 魅力のある／魅力のない	0.470	0.916	0.854	0.747	0.878	0.306	0.895	0.693
4 雰囲気がい／雰囲気が悪い	0.827	0.875	0.993	0.898	0.243	0.905	0.809	0.652
5 個性的／個性的でない	0.133	0.699	0.423	0.419	0.480	0.971	0.959	0.804
6 広々とした／窮屈な	0.350	0.071	0.959	0.460	0.616	0.148	0.345	0.370
7 穏やかな／穏やかでない	0.814	0.289	0.345	0.483	0.522	0.224	0.609	0.452
8 おもしろい／おもしろくない	0.456	0.962	0.895	0.771	0.726	0.545	0.423	0.565
9 親しみやすい／親しみにくい	0.039	0.916	0.423	0.460	0.506	0.976	0.895	0.792
10 圧迫感がない／圧迫感がある	0.025	0.292	1	0.439	0.938	0.303	0.710	0.651
11 にぎやかな／さびしい	0.729	0.537	0.999	0.755	0.694	0.355	0.345	0.464
12 人情味のある／人情味のない	0.763	0.086	0.174	0.341	0.266	0.984	0.993	0.748
13 歴史性のある／歴史性のない	0.518	0.872	0.809	0.733	0.881	0.940	0.993	0.938
14 醜い／美しい	0.513	0.977	0.854	0.781	0.060	0.791	0.809	0.553
15 複雑な／簡単な	0.596	0.128	1	0.575	0.288	0.255	1	0.514
16 秩序的／秩序的でない	0.367	0.916	1	0.761	0.783	0.840	1	0.874

註：表の中の値は有意確率で、有意水準は10%とし、小さいほど有意な差があることを示す。

略字の説明／本：本省人、外：外省人、客：客家人(以下同じ)

表6 省籍による商店街景観に対する理由付けの差異

	80年代				30年代			
	客 vs. 本	本 vs. 外	外 vs. 客	平均 値	客 vs. 本	本 vs. 外	外 vs. 客	平均 値
1 豪華な／素朴な	0.931	0.728	0.703	0.788	0.791	0.240	0.469	0.500
2 統一感のある／統一感のない	0.597	0.084	0.264	0.315	0.359	0.386	0.020	0.255
3 魅力のある／魅力のない	0.929	0.787	0.743	0.820	0.752	0.396	0.324	0.491
4 雰囲気がい／雰囲気が悪い	0.565	0.440	0.322	0.442	0.895	0.531	0.728	0.718
5 個性的／個性的でない	0.348	0.427	0.700	0.492	0.936	0.102	0.391	0.476
6 広々とした／窮屈な	0.267	0.819	0.573	0.553	0.243	0.061	0.301	0.202
7 穏やかな／穏やかでない	0.456	0.871	0.772	0.700	0.285	0.296	0.160	0.247
8 おもしろい／おもしろくない	0.187	0.124	1	0.437	0.651	0.616	1	0.756
9 親しみやすい／親しみにくい	0.635	0.806	0.659	0.700	0.501	0.780	0.409	0.564
10 圧迫感がない／圧迫感がある	0.610	0.351	0.645	0.535	0.585	0.419	0.541	0.515
11 にぎやかな／さびしい	0.803	0.065	0.854	0.574	0.598	0.913	0.664	0.725
12 人情味のある／人情味のない	0.648	0.067	0.745	0.487	0.265	0.920	0.550	0.578
13 歴史性のある／歴史性のない	0.537	0.862	0.309	0.569	0.489	0.859	0.746	0.698
14 醜い／美しい	0.778	0.129	0.314	0.407	0.320	0.452	0.175	0.316
15 複雑な／簡単な	0.289	0.011	0.408	0.236	0.164	0.218	0.338	0.240
16 秩序的／秩序的でない	0.832	0.078	0.168	0.359	0.811	0.486	0.426	0.574

図3 80年代省籍による商店街景観に対する形容詞対の理由付けの場合

図4 30年代省籍による商店街景観に対する形容詞対の理由付けの場合

意確率（以下、同じ）：0.084）、「にぎやかな／さびしい」（0.065）、「人情味のある／人情味のない」（0.067）、「複雑な／簡単な」（0.011）、「秩序的／無秩序的」（0.078）等の項目について、差異が高いと言える（表6）。表6に示したように、有意確率の平均値から省籍を問わずに80年代の商店街景観の理由付けに対する差異が最も小さい形容詞対は「魅力のある／魅力のない」であった。

(3) 省籍における30年代の商店景観に対する評価の差異

分析結果によると省籍の街路景観に対する形容詞対の評価差異は80年代より更に少ない。表5に示したように有意確率がかなり高く、有意水準10%以下となる項目は本省人対客家人の「醜い／美しい」（有意確率：0.060）だけであった。それに次いで差異があったのは本省人と外省人の「広々とした／窮屈な」（0.148）であった。表5に示したように、省籍による古都台南の30年代の商

店街景観に対する評価差異が顕著でなかったのは「豪華な／素朴な」（0.982）と「歴史性のある／歴史性のない」（0.938）である。

(4) 省籍における30年代商店景観に対する理由付けの差異

30年代の商店街景観に対する各形容詞対の理由付けの差異は、分析結果は有意水準10%以下となる項目が二つしかなかった。それは外省人対客家人の「統一感のある／統一感のない」（有意確率：0.020）と本省人対外省人の「広々とした／窮屈な」（0.061）であった（表6）。図4に示したように客家人は建物の質と窓の質や路面に注目したのに対し、外省人は大半が電線、違反駐車、街灯に着目した。また、外省人は電線、街灯の方に着目するのに対し、本省人は看板、違反駐車、路面を気にした。しかしながら、80年代の商店街景観の評価結果と異なり、理由付けの項目のうち一致しているものは一つしかなかった（図4）。それは80年代の外省人対本省人と30年代の外省人対客家人の「統一感のある／統一感のない」であった。有意確率の平均値から、省籍に係わらず、30年代商店景観に対する理由付けの差異が顕著でなかったのは「おもしろい／おもしろくない」（0.756）であった（表6）。

6. 結果考察

外省人と客家人のデータ数が小さかったものの、回答には同じような傾向があった。客家人の人数が少ないため、有意でなかったからといって差異

がないとは結論できないが、検定では有意だったものは、かなり差異が顕著であったと言える。前述の仮説で示したように外省人と客家人は街に対し批判的であり、景観構造の認知上で両者の一致性は高く、特に理由付けの項目は主に看板と建物の内側、違反駐車に集中している。これは、第2章で述べたように台南市は本省人の街と言われていることに合致しており、第2章で述べた仮説を支持する結果が得られたと言えるだろう。このような結果が得られた理由の一つとしては前述したように両者の人口比率がもともと少なく、不満なことや不平なことがあっても地域に溶け込まなければ生きていけない立場が色濃く出たのではないかと考えられる。これは、第2章で述べたように客家人は自分の省籍を明瞭に示さない傾向がみられたことに一致しており、また、外省人は長期的に政治権力を握ってかつ中国に戻ることを念頭においていたため、台湾の都市景観に対してもどちらかといえば無関心な態度をとり、権力者側の意識から批判する傾向があるという仮説にも一致した。本省人の評価結果にはばらつきが目立つ。しかしながら全ての質問項目に対して全て回答している。これは自分がつくった街に対する意識の高さの現れでもあろう。なお、全体として良いか、悪いかという質問に対しては省籍による著しい差異はなかった。

以下では各々の分析結果に対して検討、考察を行う。

(1) 省籍における80年代の商店街景観評価

7つの理由付けの中で特徴的なことは、本省人の景観への意識がまず看板に向かうことである。本省人は建物の内側より外観の方に注目する傾向があった。派手な色合いで飾った屋根、柱、きりばりなどは昔からの本省人の建物の特色である²⁶⁾。これも客家人の内側から外観までほぼ同系色となっているという素朴さとは異なる。商店街の中で派手な色合いで表現できるのは看板である。分析結果の中で本省人が商店街に対する「複雑な」

「人情のある」意識を看板と結び付けたことが本省人の特徴をよく示していると思われる。看板の色については色の調和を重視している西洋の景観学と逆であるが、しかし、これこそ台湾の特徴とも言えるだろう。「乱れの美」もしくは「台湾の美」であるとも考えられる。本省人は自分の街に対する愛着性を持ちながら、自分の街を「おもしろくない」、「親しみにくい」、「混雑している」という葛藤の気持ちもあった。しかし、その反面「人情のある」街だという声もあった。本省人の「親切だがやや過剰になりやすい商売本能」⁷⁾という「思いやり」を持つ傾向を反映していると言えるのではないだろうか。

人数の少ない外省人が選んだ理由付けは本省人より遥かに多様なものであった。中でも違反駐車が多く選ばれ、次に看板、街灯、電柱等であった。外省人は見た目より利便性を考慮する傾向があると言えよう。「傍観者清」（第三者の方がよくわかるの意）という諺のように外省人は第三者の立場で、「違反駐車と看板」を理由として、商店街の景観を「簡単な」、「人情のない」と批判する。外省人のものに対する価値観の違いと、道の通過しやすさなどを気にするということが検証できたといえる。また、外省人が商店街景観を「機能」の面から評価する傾向を示していると考えられる。

客家人と外省人の差は少なかったが、客家人は歴史的な背景により生活環境に親和しやすく、好感を持って受け入れるという点が外省人と違うところであった。しかしながら、80年代の商店街景観に対しては外省人なみに批判をする傾向があることが確認できた（表5）。

(2) 省籍における30年代の商店街景観評価

分析結果からわかるように外省人と客家人の回答傾向は差異の少ないものであった。これは、回答者の殆どが20代の大学生で、日本統治時代への思い入れがあまりない世代であることによると思われる。一方、限られたデータでも、評価の差異については客家人と本省人の間の「醜い／美しい」

理由付けの差異については外省人と客家人の間の「統一感のある／統一感のない」と本省人と外省人の間の「広々とした／窮屈な」において、有意な結果が得られた。また、省籍に係わらず、古都台南に対する「豪華な／素朴な」と「歴史性のある／歴史性のない」の評価差異がなかったことがわかった。

日本統治時代からの建物が多く残る30年代の商店街写真について、本省人と比べたところ意外に外省人の反応は平静であった。主に電柱が外省人の景観に対する判断の理由付けとして選ばれた。本省人は日本時代の建物や特別な外観の街灯を選び出した。本省人と外省人ともに美的な意味に関連する形容詞を選び出すことについては、景観構造という観点で素直に回答をしたと考えられる。前述の仮説の中で、外省人は日本的なものに情緒的な反応を示すのではないかと述べたが、今回の調査ではそのような傾向は見られなかった。本省人が判断する形容詞対の理由付けとして、建物・看板・街灯など外観がポイントとなることはここでも検証できた。外省人が本省人と大きく異なるところは、外省人は電柱を気にするが、本省人は気にしないということであった。しかし、評価値の平均とバックデータから、省籍にかかわらず30年代の商店街景観に対しては共に好感を持っていることがわかった。

7. おわりに

本研究では、省籍の違いによる商店街景観の認知の差異について評価分析を行った。その結果、30年代よりも80年代の商店街景観に対して、省籍による大きな差異が認められた。更に、前述したように特に外省人の数が少なかったために、外省人と客家人との差は必ずしも有意ではなかった。しかし、それでも有意だったものは、差が大きかったと考えてよいだろう。本省人と外省人、および本省人と客家人との間では、それぞれ有意な差異が認められた。

まちづくりにおいて、街路景観を造るための主体は住民である。しかし、習俗や出身また歴史的文化的な背景など、さらに省籍に起因する複雑な要素（政治上、経済上と教育レベルなど特に台湾意識の有無）をもつ台湾におけるまちづくりでは「省籍の意識」が原因となって、合意形成が困難である^{3) (27) (28)}。本研究の第17形容詞対「全体として良いか悪いか」のカイ二乗分析結果には差異がなかった。しかし、例えば、本省人と客家人の間では1930年代の街に対する「醜い／美しい」の認知差異、および本省人と外省人との間では1980年代の街に対する「親しみやすい／親しみにくい」評価において有意な差異が認められた。このような認知の差異は台湾の都市環境の中の一部につながる可能性があるので、景観に対する影響も発生しうるのであろう。これらの問題を解決するには、発生しうる要素をできる限り取り出して、定量的に検証を行い、省籍による差異を最小限にする努力をし、合意形成をはかっていく必要がある。住民の本質的なニーズを捉え、適切にまちづくりにいかして質のよい景観や環境を造っていくことが台湾ひいては国際社会の都市づくりにおいて、今後の重要な課題である。

〈謝辞〉

本研究を実施するにあたって、アンケートに協力していただいた台湾成功大学88級の学生の皆さんと担当教官の黄秋月先生、孔憲法先生、及び文化大学88級学生の候佩吟氏、筑波大学氷鮑揚四郎先生、筑波大学天田高白先生、所属研究室のOBの中澤藤江、および匿名の査読者の方々より有益な情報や助言をいただきました。また、本研究の実施にあたり、文部科学省科学技術振興調整費の助成を受けました。記して謝意を表します。

補注

(1) 化外の地：未だ人の手で開発の少ない場所

(2) 1998.12.29／中国時報、「……李登輝總統昨天接見「人權

教育基金會」人権記念碑建碑委員柏楊等人時、透露他以前曾經差點被政治人員抓走的一段往事，並且強調我們要告別悲情，從悲情中尋找幸福，如此悲哀也會變成幸福，這就是他提出「新台灣人」的意義。』

(3)軍眷村：1949年中国から台湾にきた軍人又はその家族を対象として造った村のことである。

(4)各々の省籍に特有な建物風貌

(5)反攻大陸：50年代から80年代まで蒋介石が主導した国民党政府からの政策で中国に反攻するという教育哲学があった。いわば民族教育における思想の改造といえる。

(6)過路客：永久の居場所にしない旅客；外省人は台湾を永久の居場所としないのでこのような名を付けた。

(7)「優越感を持つ外省人」：1949年に台湾島に絶対的な統治者の姿で現れたためいまでも大中国の情緒を持っている。本省人の社会に溶け込みにくい状態とも言える。

(8)客家精神について、イギリスの研究家E. J. Eitelは、「一般に中華民族は保守的な特性を持つのにに対し、客家人のみは例外的存在といえる。彼らは革命的であり、進取の気分にあふれている」「彼らは剛柔双方の特色を持つが、剛毅仁愛であると共に侮れない強暴の精神を持つ民族である」としている（「客家史綱」）。「頑固な客家人」：頑張りや且つ正義感をもつ客家人の場合は喋るより黙って行動する人間であろう。同参考文献の3）、4）参照。

(9)以上の論文のデータソースについては、1970年から1999年初まで学生論文に関しては約6500件の卒業論文、修士論文、博士論文から検索した。また、審査付き論文と委託調査報告書などは学会誌と専門雑誌総数約2950点の刊行物から選び出した。

(10)アンケート対象者の選定経緯：省籍の差異を明確に出すためには、日本統治時代からずっと台湾にいた高齢者をアンケート対象者とする事も考えられる。しかし、質問内容について専門知識のない高齢者には難しいと判断し、アンケート対象者とする事を断念した。

(11)「醜い・美しい」の7段階評価：非常に醜い、醜い、やや醜い、どちらもない、やや美しい、美しい、非常に美しい。評価得点はこの順に1～7とした。

(12)カイ二乗値は $X^2 = \sum_j \sum_i (O_{ij} - E_{ij})^2 / E_{ij}$ で定義される。（ただし、 O_{ij} ：観察頻度、 E_{ij} ：期待頻度、 $i=1,2$ は省籍、

$j=1, \dots, 7$ は尺度の数、 X^2 ：カイ二乗値、自由度 $df=6$ ）省籍による差異がないとすれば、期待頻度は $E_{ij} = (\text{列の総和} \times \text{行の総和}) / \text{総サンプル数}$ で計算される。

(13)例えば、外省人对本省人の違いについて検定する場合、それに対応する添え字を「外」「本」、 X ：評価項目の頻度、 N ：観察値の総数とし $P_{ij} = X_{ij} / N_i$ (i =外,本; $j=1 \sim 7$ 理由付け要素番号)、 $Q_i = (X_{i1} + X_{i2}) / (N_{i1} + N_{i2})$ とすると、 $X^2 = N_{i1} N_{i2} [\sum_j (P_{ij} - Q_i)^2 / Q_i] / (N_{i1} + N_{i2})$ は自由度6のカイ二乗分布に従う。有意確率は小さくほど差があることを示す。

参考・引用文献

- 1) 陳運棟 (1994)「歴史と族群の視点からみた義民信仰」『客家文化検討会論文集』行政院文建會
- 2) 笠原政治・植野弘子 (編) (1995)『台湾』河出書房新社
- 3) 呉乃德 (1997)「台湾階級流動的族群差異及原因」『台湾社会学研究』第1期 pp.137-167
- 4) 李筱峰 (1997)「最勇敢と知恵の台湾人」<http://www.gati.org.tw/articles/lee97>
- 5) 施正峰 (1997)「台湾の族群政治」『教授論壇専刊』第4期, pp.73-108
- 6) 黄士旂 (2000)『台湾族群研究目録』捷幼出版社
- 7) 李光真 (1999)「外省流亡曲」『光華雜誌』12月号 p.90
- 8) 劉還月 (1999)『台湾客家風土誌』常民文化出版社
- 9) 吳濁流 (1977)『アジアの孤児』遠行出版社 (台湾版)
- 10) 張瓊方 (1998)「也是原郷」『光華雜誌』4月号 p.50
- 11) 黄漢洲 (1987)「都市街路の景観制御研究」中興大学都市計画研究所修士論文
- 12) 蔡仁毅 (1993)「広告看板における都市景観の影響の研究」『營建季刊』pp.25-47
- 13) 蔡仁毅 (1994)「都市景観から広告看板の設置とその影響の研究」『中華民国建築師雜誌』(上：8月, pp.60-65, 下：9月, pp.96-99)
- 14) 郭瑞坤 (1994)「アニメーションと視覚模擬における都市景観評価の応用」中山大学 委託調査報告書
- 15) 郭瑞坤 (1996)「アニメーションと視覚模擬における都市景観評価の応用」建築学報 pp.69-82
- 16) 鄭脩平 (1995)「景観模擬評価景観制度の研究」成功大学都市計画研究所修士論文

- 17) 林晏州 (1996)「街路樹の景観美の評価」台湾大学 委託調査報告書
- 18) 章錦瑜 (1997)「台中市道路景観美質の評価」東海学報 pp.25-36
- 19) 李素馨 (1997)「都市視覚景観に関する好みの研究」逢甲大学 委託調査報告書
- 20) 候錦雄 (1997)「住民が公園景観維持の参加意欲に関する研究」東海大学 委託調査報告書
- 21) 周菊香 (1997)『府城今昔』台南市政府
- 22) 篠原修 (編) (2000)『景観用語事典』彰国社, p.72
- 23) 熊谷完士 (1981)「商業地景観の評価に関する研究」, 筑波大学社会学類卒業論文
- 24) 劉淑恵 (1989)「住民評価による商業地景観整備方策に関する研究」筑波大学環境科学研究科修士論文
- 25) 浅見泰司, 瀬川祥子 (1998)「少子化現象と住宅事情」『住宅土地経済』NO.29, pp.26-33
- 26) 藤島亥治郎 (1993)『台湾的建築』台原出版社
- 27) 徐正光 (1995)「台湾の族群関係」『台湾史と台湾史料 (二)』呉三連台湾史料基金会, pp.241-281
- 28) 王甫昌 (1998)「族群意識, 民族主義與政党支持」『台湾社会学研究』第2期 pp.1-45